

聖書におけるろばのイメージ —エコロジカル聖書解釈のこころみ¹

大 宮 有 博

はじめに

本稿は、ろばに焦点をあてて聖書を読むことで次のことを明らかにする。まず、ろばは、人間にとって生産用具であり、商品であり、財産であるが、聖書の律法において、人間に使役される動物は奴隷や寄留者と同じようにエジプトにおけるイスラエルの祖先の姿であり、それゆえに保護されなければならない存在である。ろばは人間に使役される存在の象徴である。次に、「バラムとろば」(民22:22-35)において神は、エジプトにおいてそうしたように、不正義・暴力に耐える存在——エジプトにおいてはヘブライ人、この箇所ではろば——に抗議する声を与え、解放した。すなわち、神は人間だけでなく、人間以外の被造物の声も聞き、それらに声を与え、人間による搾取と抑圧から解放するのである。

聖書のろばに関する先行研究は、辞書・事典の項目と「バラムとろば」物語(民22:22-35)に関する研究に集中する。いずれの聖書辞書・事典の「ろば」の項目は小項目であり、内容も人間がろばをどのように用いるかに焦点がおかれている²。聖書におけるろばの文学的役割を説明するものは見つけられなかった。

1 本稿は2023年9月6日-7日に行われた日本基督教学会第71回学術大会(於:上智大学)で発表した原稿に大幅に加筆・修正したものである。また、本稿4節は2024年3月刊行の『エコロジカル聖書解釈の手引き』(キリスト新聞社)に一部改変して掲載する。本稿での聖書の引用は聖書協会共同訳にしたがった。

2 『旧約新約聖書大事典』(教文館、1989年)、『新共同訳聖書事典』(日本キリスト教団出版局、2008年)などの「ろば」の項を参照。例外として、ウィリアム・スミス編、小森厚・藤本時男編訳『聖書動物大事典』(図書刊行会、2002年)の「ろば」の項(40-51頁)。

また、民数記の注解のほとんどが、22～24章を一つの文学ユニットとして扱うため、モアブの王バラクとバラムの「かけ合い」で物語が進行し、22章の言葉が話すろばは神のパペット程度にしか捉えられていない³。また、これまでのエコロジカル聖書解釈による「バラムとろば」に関する研究は、聖書においてろばが寄留者や奴隷と同じ様に擁護されるべき存在であることに気がついていない⁴。

本稿はアース・バイブル・プロジェクトが提唱するコロジカル聖書解釈の手法を用いる。この解釈は、懐疑、同一化、回復の三段階のアプローチで聖書に登場する人間以外の被造物（動植物、山や川、海、石や土…）に焦点をおき、それらの声を回復することを試みる⁵。「懐疑」とは、聖書テキストあるいはこれまでの聖書解釈にこめられた人間中心主義を明らかにすることである⁶。「同一化」あるいは共感的理解とは、読者が人間によって搾取され抑圧されている被造物に同一化してテキストを読むことである。回復とは、人間によって声なきもの

3 マルティン・ノート著、大隅雄一訳『民数記』ATD・NTD 聖書註解刊行会、2018年（原著1966年）、277-323頁、D. T. オルソン著、山森みか訳『民数記』日本キリスト教団出版局、1999年（原著1996年）、225-242頁。Baruch A. Levine, *Numbers 21-36*, Anchor Bible 4A (New York: Doubleday, 1964), 157. 例外は Jacob Milgrom, *Numbers*, JPS Torah Commentary (New York: Jewish Publication Society, 1989).

4 Cameron B. R. Howard, "Animal Speech as Revelation in Genesis 3 and Numbers 22," in *Exploring Ecological Hermeneutics*, eds. Norman C. Habel and Peter Trudinger (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2008), 21-29; Anthony Rees, *Voices of the Wilderness: An Ecological Reading of the Book of Numbers* (Sheffield: Sheffield, 2015), 81-85; Hendrik Viviers, "The 'wonderful' donkey -Of real and fabled donkeys" *HTS Theologies Studies/Theological Studies* 75.3(2019), a5479. <https://doi.org/10.4102/hts.v75i3.5479>; Ken Stone, "Wittgenstein's Lion and Balaam's Ass: Talking with Others in Number 22-25," in *the Bible and Posthuman*, ed. Jennifer L. Koosed (Atlanta: Society of Biblical Literatur 2013), 75-102.

5 Norman C. Habel, "Introducing Ecological Hermeneutics," in *Exploring Ecological Hermeneutics*, eds. Norman C. Habel and Peter Trudinger (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2008), 1-8. このうち懐疑と回復は、フェミニスト聖書解釈の手法を継承したものである。
6 エコロジカル聖書解釈が明らかにするテキストの人間中心主義とは、地 (Earth) に存在するあらゆるものが本来持つ本質的な価値と被造物同士の有機的なつながりを否定し、人間以外の被造物は人間が生きるためのものであり、人間に用いられてはじめて価値があると認める認識である。ここからさらに [神→人間 < 男→女 > →人間以外の被造物…] というヒエラルヒー的な見方が成立する。

とされた「地球」(Earth)⁷の声を回復することである。

1. 聖書におけるろば

「ろば」と訳される5つのヘブライ語を以下の表に挙げる。このように見ると、家畜とされたろばだけでも雄、雌、若ろばと3つ言葉が、また野生のろばについても2つの言葉がある。これらの言葉がどのように使い分けられたかは聖書だけでは判然としないが、このことはろばが人々の生活に近かったことを示す。

חמור	「ろば」または「雄ろば」	
אתון	協会共同訳では「雌ろば」	創 12:16 と 45:23 ではハモールと、創 32:10 と 49:11 ではアイルとともに用いられる。「バラムとろば」(民 22 章) = 雌ろば。
עֵזֶר	「雄ろば」または人や荷物を載せられる年齢の「若ろば」	「ろばの背に財宝を」 = イザ 30:6 「地を耕す牛やろば」 = イザ 30:24 「野ろばの子」 = ヨブ 11:12
פָּרָא	「野ろば」	エレミヤ書 2:24 ではפָּרָאが発情する姿を通して、イスラエルを批判する。ろばは雌が発情するので、この場合は雌。
עֲרוּד	「野生のろば」	ヨブ 39:5 の 1 回のみ。 פָּרָאとעֲרוּדは種の違いとする説もあるが不確か。



家畜ろば(王子動物園のろば)
神戸市立王子動物園のろば(雌)ナズナ。後のページに掲載したソマリノ
ロバが家畜化されたものである。[筆者撮影]

7 アース・バイブル・プロジェクトでは、神によって造られた森羅万象を定冠詞なしの Earth と呼ぶ。本論では「地球」と訳出した。Habel, "Introducing," 2.

2. 家畜とされたろば

この節では聖書が描くろば(家畜)と人間の関係に焦点をあてる。ろばは繁殖・売買を生業とする農家で、家畜として生まれる(創 36:24; サム上 9:3)。したがって、ろばは、生来、人間に依存して生きる。何世代にもわたって人間によって家畜とされたろばは、人間が扱いやすい性格である⁸。また、ろばは馬に比べて小柄でも足腰が強い。さらに、多少かたい草でも枝でも食べる。また食べる量も馬に比べると少ない⁹。したがって、農民にとっては飼いやすい家畜であった。

2.1. 聖書に描かれたろばと人間とのかかわり

サウルは王となる前、父の雌ろばが数頭いなくなったので、3日探し回った(サム上 9:3-5, 20)。彼の父がろばを繁殖させて売っていたのだとすると、子を産む雌ろばが数頭いなくなれば損失は大きい。律法は、ろばや牛が道で倒れたり、迷っていたりしたら、それが敵のものであれ同胞のものであれ、その所有者に戻すように命じている(出 23:4-5; 申 22:1-4)。サウルが3日でろばを探すのをやめたのは、この律法をある程度あてにして、あきらめたと考えられる。ヨブ記に「彼らはみなしごのろばを連れ去り / やもめの雄牛を質に取る」(24:3; 参照 6:5)とあるが、農民にとってろばを取られると、それまでの生業を営めず、路頭に迷うことになる。農民にとって、ろばは大切な働き手であり財産であった¹⁰。

聖書によると、ろばは荷物の運搬や乗用(創 22:3-5; サム上 25 章などを参照)、農耕(イザ 30:24)などに用いられた。また、戦争では荷物の輸送(王下 7:7)に用

8 ろばは東アフリカで5000年以上前に家畜化されたと考えられる。家畜化されたろばはイエロバで、野生のろばはノロバで遺伝的に異なる。家畜化されたろばはもともとアフリカノロバで、旧約聖書に出てくる野ろばはアフリカノロバではなくシリアノロバ(すでに絶滅)と考えられなくもない。いずれにしても、見る人が見れば体格も異なるかもしれない。

9 Viviers, "The 'wonderful' donkey," 2.

10 ろばが家の財産として数えられる時、羊や牛、奴隷とともに数えられる。例: 創 30:43; 32:5-6; 出エ 20:17; 22:3, 9; ヨブ記 1:3; 42:12. 民数記 16:15においては、モーセは自分に逆らう民について「私は彼らからろば一頭も取ったことはない」と言っている(参照: サム上 12:3)。

いられた。

箴言には「馬にはむち。ろばにはくつわ。愚かな者の背に杖」(26:3)という言葉があるが¹¹、ろばはむちや杖で打たれ、くつわをはめられて重い労働を強いられた。ろばはしばしば、人間の思いどおりに動かなくなる。このことから人間は、ろばは融通がきかず、頑固な動物であると決めつける。しかしそれは見方を変えると、ろばは数千年にわたって家畜化されても¹²、人間に主体性を完全に奪われていないということである¹³。ろばのみならず家畜とされた動物は日常的に「人間の命令を無視し、労働をやめ、搾取する者に噛みつく」¹⁴ことで人間に抵抗をする。それに対して、人間はむちやくつわで家畜とされた動物の抵抗を制圧する(参照:イザ 37:9; ヤコ 3:3)。

聖書はろばを人間とともに力を合わせて働く、人間に身近な動物として描く。聖書においてろばはしばしば牛と併記されるが¹⁵、それは両者が農村において、農耕などの力仕事につくからである。

また、ダビデの時代から 20 世紀中頃まで、パレスチナの一般的な農民の住居において、ろば、牛、羊といった家畜は家族の居間の横にある土間で飼われ、まさに寝食をともにした¹⁶。さらに一頭のろばが一つの家族と過ごす期間は他の

11 シラ書 33 章 25 節には「ろばにはまぐさと鞭と重荷。召し使いにはパンと訓練と仕事」という言葉がある。文脈から考えて、「ろばには…」の一文は、中近東の格言の引用である。山下によると、ローマにも「ろばにはまぐさと荷とむちを」という言葉があるという。山下正男『動物と西欧思想』(中公新書)中央公論社、1974 年、95-96 頁。著者はローマ時代の文献からこの言葉を見つけられなかった。いずれにしても、この言葉は広く使われていた引用と考えられる。

12 ろばが家畜化されたのは約 5000 年以上前。Viviers, The 'wonderful' donkey," 2.

13 サラット・コリング著、井上太一訳『抵抗する動物たち グローバル資本主義時代の種を超えた連帯』青土社、2023 年、91-92 頁。「飼いならし」は動物植民地化であるが、動物は日常的に人間に抵抗する。人間は完全に動物を植民地化できていないと、コリングは主張する。

14 コリング『抵抗する動物たち』175 頁。

15 例えばヨブ記 1 章 14 節には「牛が畑を耕し、その傍らで雌ろばが草を食んでおります」と農村の様子を描写している(参照:イザ 30:24)。

16 ケネス・ベイリー著、森泉弘次訳『中東文化の目で見えたイエス』教文館、2010 年、36-40 頁。

動物よりもずっと長かったと考えられる¹⁷。しかし、ろばは死ぬと、その亡骸は門の外のごみ捨て場に捨てられた¹⁸。このようにろばはあくまで人間に用いられて価値が認められるが、その本質的な価値は認められていない。

なお、西洋文明においてろばは、頑固で愚かとされてきた。例えば『イソップ寓話集』はろばをそのようなものとしてカリカチュア化する¹⁹。しかし聖書全体を見渡した時、ろばを「愚かな者」と同一視する箇所は見つからなかった²⁰。このようなことから、ろばを頑固で愚かとする認識は、聖書の世界の外で、しばしば人間の思いどおりにならない彼らの生態から生まれたものと考えられる。

2.2. 安息日規定とろばを保護する法

・安息日規定²¹

あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、
寄留者も同様である。(出エ20:10)

家畜も、町の中にいるあなたの

あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、生やろばなどのすべての家畜も、町の中にいるあなたの
寄留者も同様である。(申5:14)

17 人間と家畜がともにいる期間は、食用となる羊や山羊はせいぜい4～5年なのに対して、ろばは30年近くである。旧約聖書の法はひづめが分かれておらず反芻しない動物を食べることを禁じている。したがって、イスラエルの民はろばを食べなかったし、犠牲として捧げることもなかった(出34:20)。列王記は、極限の飢餓にあって、ろばの頭が鳩の糞とともに食用として高額で売られたと報告する(王下6:25)。同じ報告のなかで、親が自分の子を食べたとも述べられている(王下6:29)。この記事は、ろばが食べられたということの記録ではなく、ろばや鳩の糞、わが子まで食べなければならないほどの極限の状態を強調する意図がある。

18 「彼はろば(תמור)が埋められるように埋められる。彼は引きずられ/エルサレムの門の外に投げ捨てられる」(エレ22:19)。サムソンは「新しいろば(תמור)の顎骨」を見つけたとあるが、それはそのように捨てられたろばの死体の一部だったと考えられる(士15:15)。

19 『イソップ寓話集』にはろばが登場する話が多い。そのなかで特にろばを嘲笑の対象とするものとして「149 ライオンと驢馬と狐」「181 神像を運ぶ驢馬」「184 驢馬とせみ」「185 ゼウスに訴える驢馬」「186 驢馬と驢馬追い」「359 ふざける驢馬」などが挙げられる。中村哲郎訳『イソップ寓話集』(岩波文庫)岩波書店、1999年。話の頭の数字は中村訳から。

20 聖書においてろばが「愚かな者」と並べられるのは、先に挙げた箴言26章3節ぐらいである。箴言には「愚かな者」がくり返し出てきて、嘲笑や批判の対象となる。

21 安息日規定に関する考察は、大宮有博「安息日のエコロジカル解釈」『関西学院大学キリスト教と文化研究』24(2023年): 1-23頁を参照。

十戒の第四戒は安息日規定である。出エジプト記 20 章の十戒は世界が作られた時の調和を取り戻すために(出 20:11)、申命記五章の十戒は神によるエジプトからの解放を想起するために(申 5:15)、安息日を定める。

出エジプト記の十戒も申命記の十戒も「家畜」²²を、奴隷と寄留者とともに安息日に仕事を休めるもののリストに挙げている。申命記の十戒は「牛やろば(רוֹמָה)」を名指しする。これに加えて、契約の書(出エ 20:22-23:19)の安息日規定も「六日間はあなたの仕事をし、七日目には休みなさい。そうすれば、あなたの牛やろばは休みを得、女奴隷の子や寄留者は一息つくことができる」(出 23:12)と、「牛やろば」をわざわざ挙げている。

律法において奴隷と寄留者も、エジプトで苛酷な労働によって虐げられたイスラエルの民の姿であり、保護の対象であった²³。荷役や農耕の力仕事をする牛やろばの姿は、エジプトにいたころのイスラエルの姿とも重ねられる²⁴。そういうわけで、牛やろばが奴隷と寄留者とともに、安息日に招かれたのである。安息日規定が言わんとしていることは、神は安息日をとおして、力仕事をする牛や馬を、寄留者や奴隷、貧しい者とともに解放(救済)しようとしているということである。

22 ここで「家畜」と訳されたヘブライ語 **בְּהֵמָה** は、這うものや飛び跳ねるものを除く人間以外の地上の生き物を指す。日本語訳聖書はいずれの訳も「家畜」と訳しているが、単に「動物」とも訳せる。

23 そのうち寄留者は、寄留者を保護する法のなかで「あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである」(出 22:20; 23:9 など)とあるように、エジプトにいた頃のイスラエルの民の姿に重ねられている。また奴隷も、このリストに続いて「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない」(申 5:15)とある。

24 創世記 49 章 14-15 節は、力仕事をするろば(רוֹמָה)の姿を奴隷と結びつける。ヤコブが子どもたちを祝福する言葉のなかでイッサカルを「骨のある(=力強い)ろば」とし、「その肩をかがめて荷を担い。苦役を強いられる奴隷となった」(フランシスコ会訳)と述べる。**מַמְסָה** は公によって課された労役あるいは強制された労働の意味がある。協会共同訳は「苦役の労働に従事する」と訳すが、フランシスコ会訳は、カナン人が課した労働をエジプト人がイスラエルに課した労働と重ねて訳す。

・ろばと牛と一緒に働かせるな

牛とろば(רֹבֵּי)と一緒にして耕してはならない。(申22:10)

牛やろばが農耕で働く姿が、イザヤ書 30 章 24 節にある。場所や時代は大きく異なるが、『イソップ寓話集』に「耕作する牛と驢馬」という話があるが、そのなかに「牛を一頭しかもたぬ男が、牛と驢馬を軛につないで耕作していたが、貧しさゆえにこれも止むをえないことだった」²⁵という言葉がある。この寓話は、牛とろばが一つのくびきにつながれて耕作をさせられることがあったということ、本来このようなことがあってはならないが貧しい農家にとっては仕方がないことだったということを示す。体の大きさや力の違う動物が一つのくびきでつながれて鋤をひけば、体の小さいほうが引きずられてしまう。この法はろばを保護する法である。

2.3. ろばは平和をもたらす「正しい者」を乗せる

娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。あなたの王があなたのところに来る。彼は正しきものであって、勝利を得る者。へりくだって、ろばに乗って来る/雌ろばの子、子ろばに乗って。(ゼカ9:9)

このゼカリヤ書 9 章 9 節は、メシアがろばに乗ってくると述べる。この言葉にしたがって、福音書はイエスがろばに乗ってエルサレムに入ったと述べる²⁶。馬は支配者が乗り、戦争に使われる。それに対して、ろばは庶民が普段乗るものである²⁷。「へりくだって、ろばに乗る」メシアは、戦争ではなく平和を、そして公正を身分の低い者にまでもたらすと連想されたであろう。

25 中務哲郎訳『イソップ寓話集』219-220 頁。

26 とりわけマタイによる福音書とヨハネによる福音書はゼカリヤ 9 章 9 節を引用する(マタ 21:5; ヨハ 12:15)。

27 ソロモン王はエジプトとクエから馬を輸入した(王上 10:28; 代下 1:17; 9:25, 28)。それ以降、馬は軍用である。また、王族の平時の乗り物として(ろばとうまの交雑種である)らばも用いられる(例:サム下 13:29; 18:9) デボラの歌(士5章)には「白い雌ろば(tinš)に乗り/敷物に座り/道を行く者よ、歌え」(士 5:10)とあり、希少種である「白いろば」が高貴な者が乗ったことがわかる。『聖書動物事典』にはバグダッドの市場で白いろばを目撃されていることが記されている(42 頁)。



ソマリノロバ(東山動物園のろば)

名古屋市東山動植物園のソマリノロバのサクラ。聖書に出てくる家畜ろばの原種。日本で唯一の飼育個体だったサクラは2019年7月30日に亡くなった。彼女の死亡によって、ソマリノロバは日本にいなくなったことになる。なお、現在、ソマリノロバは野生での絶滅の危険性の高い絶滅危惧種(CR)としてレッドリストに指定されている。

[提供：名古屋市東山動植物園]

3. 野ろば / 野生のろば

聖書において、野ろばは家畜とされたろばとは違うイメージで描かれる。

「誰が野ろば(אֲרָבָה)に自由を与えたか、野生のろば(תִּירָה)の繋ぎを解いたか。わたしは彼の住処を荒野とし、その生息地を塩地に決めたのだ。彼は町の喧騒を嘲笑い、御者が声を張り上げても耳を貸さず、彼は餌場の山々を見回り、青草をくまなく探し求める。」(ヨブ39:5-8並木訳、ヘブライ語は大宮)

この引用箇所には、人間を避けて不毛の地で生きる野ろばが描写されている。他にもイザヤ書32章14節には、廃墟に住む野ろばが描写されている。野ろばのような自由な生き方は、家畜のろばとは違う苦難が伴う(ヨブ6:5; エレ14:6も参照)。この箇所から「人間に支配されない自由を確保するためには、いかなる苦勞も厭わないというプライドが伝わってくる」²⁸。

見よ、彼らは荒野の野ろばだ、仕事のためには、どこにでも出ていく。彼らは餌を探しまわる者たちで、その子どもたちのパンのためには荒れ地にも向かう。(ヨブ24:5)

この箇所は、子どもを飢えさせないために日雇い仕事を求めてしぶとく生き

28 並木浩一『ヨブ記注解』日本キリスト教団出版局、2021年、403頁。

る貧しい者の姿を、野ろばの姿に重ねる²⁹。ここで貧しい者は、富める者に慈悲を乞うて生きる弱者ではなく、しぶとく生きる民である。このことを念頭において、次に主の使いがハガルにその子イシュマエルについて述べた言葉を引用する。

彼は野ろばのような人となり/その手はすべての者に逆らい、すべての者の手は彼に逆らう。
彼はすべての兄弟と対立して/暮らすようになる。(創16:12)

ここでは荒野で生きる野ろばの姿が、アブラハムの家から追放されても強く生きるイシュマエルの姿に重ねられている。

ところで野ろばは雌が発情し、発情すると雄を探すのに、雄のふんをかいでまわる³⁰。預言者たちはその姿を通して、異教の神や外国の勢力になびくイスラエルを批判する。すなわち、エレミヤはその発情する雌の野ろばの姿を異教の神々を拝むイスラエルの姿に重ね、ホセアはアッシリア王に貢物を持っていくイスラエルの王の姿に重ねて批判する。

荒れ野に慣れた野ろばだ。自分の欲情に息を切らしている。さかりの時、誰がこれをしづめられるだろう。彼女を求める者は、苦労は要らない。その季節になれば、見つけ出せる。(エレ2:24)

彼らはアッシリアに上って行く孤独な野ろば。エフライムは贈り物で愛人たちを得る。(ホセ 8:9)

このように野生のろばは、しぶとく生きる民を象徴した。他方で、何にも縛られない野ろばの自由な姿は、ヤハウェから離れようとするイスラエルの民と重ねられることがあった。

29 並木『ヨブ記注解』403頁。なお、シラ書には「荒れ野の野ろばが、ライオンの餌食となるように/貧しい人は、金持ちの牧草となる」(13:19)という言葉がある。

30 Kenneth E. Bailey and William L. Holladay, "The 'young Camel' and 'wild Ass' in Jer. II 23-25" *Vetus Testamentum* 18 (1968), 256-260.

4. バラムとろば (民 22:22-35)

ここでは「バラムとろば」(民 22:22-35)をエコロジカル聖書解釈の懐疑・同一化・回復の手順で解釈する。多くの研究者が民数記 22-24 章は民数記全体に挿入された独立した物語「バラム物語」と想定する³¹。ミルグロムは、「バラムとろば」と題される民数記 22 章 22-35 節がもともと独立した「民話」であり、この「バラム物語」に挿入されたと主張する³²。

4.1. 懐疑

この物語は、焦点をバラム (=人間) にあてるか、ろば (=動物) にあてるかで読み取れるメッセージが変わってくる。ここでは、まず、これまでの解釈がそうしたように、バラムに焦点をあてて読み、その読みで明らかにできることと、その読みの限界を明らかにする。このように読むと、この物語は、モアブの王バラクに召喚されたバラムが、主の使いと対話することで、神にしたがうことを改めて表明する回心物語であるということが出来る。物語の主な登場人物はバラムと主の使いであり、ろばは物語の後半で後景に消える³³。

31 民数記全体はモーセの指導するイスラエルの民の荒野の物語である。しかし、22-24 章にモーセは登場せず、場面全体もイスラエルの民の外で起きている。ここでは、モアブの王バラクとバラムのやり取りで物語が進行する。ミルグロムは、トランスヨルダン地域において知られていた伝説的先見者の記事に基づいてこの物語が作られたと考える。Milgrom, *Numbers*, 473-476.

32 その理由として、以下に挙げるとおり、ユニットの前後のつながりの悪さがあげられる。ノート『民数記』299-300 頁、Milgrom, *Numbers*, 468 など。(1) このユニットの直前 (22:20) で神はバラムが行くことを許したのに、この物語の冒頭 22 節でバラムが行ったことに怒りを燃やしている。(2) また、このユニット (22-35 節) にバラクも彼の高官たちも出てこないが、このユニットの前後の 21 節と 35 節の終わりに高官たちが言及されている。(3) さらに 22-24 章の物語の主役はバラクなのに、このユニットではバラムが主役になっている。ユニットの前後のつながりの悪さに加えて、ミルグロムは場面描写の問題として、バラムの住むユーフラテス川のほとりにある町からモアブの平野は荒野であるのに、ここでは畑やぶどう畑の間を旅していることも指摘する。またミルグロムは、旅の道中で悪魔と対峙するというモチーフは民話にめずらしくないとし、この話に類似したイタリアの民話を紹介する。Milgrom, *Numbers*, 468-469.

33 物語が展開する後景に、バラムの二人の従者と多数のモアブの高官がいることは容

4.1.1. バラク

モアブ王バラクは、この物語(22-35節)には名前すら出てこないが、この旅のきっかけをつくった人物である。バラクはモアブの平野に侵入するイスラエルの民を、野の草を食いつくす牛やいなごといった自然の力と同一視し³⁴、当時、自然の力を制御する時に使う占いの力で、この民を追い払おうと考えた。そこで、報酬を持たせて使いをバラムのもとに送った。しかしバラムは、神の命令にしたがって、バラムの召喚に応じなかった。そこで彼は「前より多くの、位の高い高官」(14節)を送ってバラムを説得しようとした。バラクはバラムが報酬をつりあげるために駆け引きをしていると考えた³⁵。バラクは自分の権力と富をもってすれば、神が定めた自然現象や歴史の定めをあやつることができると考えていた。このバラクの姿は、力(=技術も含めて)と富で自然を従えようとする人間の傲慢さに通じる。

4.1.2. バラム

この物語でバラムは、2つの点で読者の笑いを誘う道化方(役)である。まず、彼は自然をあやつることができると思っていたが、自分の飼っている雌ろばす

易に想像できる。バラクが派遣した位の高い高官たちはこの物語の枠の外に出てくる(21節と35節)。二人の従者(=若者)は22節にのみ触れられている程度である。彼らが物語にすることで、ろばだけが主の使いを認めてバラムを守れたということがわかる。

34 バラクはモアブの平野に侵入するイスラエルの民の様子を、牛やいなごが草を食いつくして、いなごの害と重ねていることは、民数記22章5節のバラクの言葉を出エジプト記10章5節と15節のいなごの害の描写とを比較せよ。Viviers, "The 'wonderful' donkey," 6.

35 マゴネットは神の言葉がバラムからバラクの高官たち、バラクの高官からバラクに伝言される過程で少しずつ大切な部分が削られていることを指摘し、それがバラクの思い違いの原因とする。すなわち神はバラクに「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。その民を呪ってはならない。その民は祝福されている」と述べた。バラムが高官に伝える時、彼は「私があなたがたと一緒に行くことを、主が許されないからです」と伝え、イスラエルの民が祝福された民であることを伝えなかった。高官たちはバラクに「バラムは私たちと一緒に来ることを拒みました」と、神がバラムに行くことを禁じたことを伝えていない。ジョナサン・マゴネット『『言葉を話すろば』(聖書)をめぐるラビ的解釈』『西南学院大学神学論集』75(2015年): 123-142頁、特に128-129頁。

ら御することができなかった。次に、雌ろばは懸命に彼の命を救おうとしているのに、彼は彼女を暴力的に黙らせてまでして危険に飛び込もうとした。

彼は占い(祝福と呪い)によって自然災害や戦争をあやつる能力を持ち、神の言葉を取り次ぐことができた(民 22:6)。しかし、彼は自分の力は神が許した時のみ発揮でき、神が告げることしか告げられないことを自覚していた。にもかかわらず彼は、バラクが言い値の報酬を約束してきた時、それに目がくらみ、神に再び伺いを立てた。彼は神に交渉すれば神は考えを変え、自然の力を制御できるようにしてくれると考えた。すなわち、バラムにも、バラクと同じ高慢さがあったのである。

さて、神の許しを得たバラムは、自分の雌ろばに乗って旅に出た。しかし、雌ろばは道をそれて畑に入ったり、石垣に体をおしついたり、うずくまったりして彼の思いどおりにならなかった。この彼のこっけいな姿を、物語の後景にいる彼の2人の従者(23節)とバラクの高官たちも見ていたはずである。それゆえに彼は「怒りに燃え」(27節)た。

バラムは雌ろばを(素手で)2度打ち、最後は杖で打った。杖は、鞭やくびきとともに動物や人間に労働を強い³⁶、懲罰を加えるために用いられた(詩 89:33)。また危害を加える動物と立ち向かう時にも杖が使われた(サム上 17:43)。このようにバラムの杖は、動物や弱い民に対してふるわれる暴力と労働力の搾取を象徴している。

バラムは、雌ろばが人間の言葉で「私を三度も打つとは」と訴えても、まったく意に介さなかった。動物が人間の言葉を話せば、驚くはずである。しかし、彼はそのことに驚くどころか「私の手に剣があったら、今お前を殺していただろう」と、まるで動物の所有者にはその動物の生殺与奪の権利があるかのように主張し、相手を黙らせようとした。この彼の恫喝は雌ろばの反論によって覆されている。

言葉を奪われ抑圧された存在——弱い立場の人々であれ、動物であれ——は、

36 イザ 9:3; 10:24 参照。なお詩編 23:4 では杖と鞭が羊を力づけるとあるが、羊とろばでは境遇が違う。(羊は杖と鞭で荷を運ばされることはない。)

様々な方法で、自分たちが甘受する収奪や暴力について権力者に抗議する。このような存在からの抗議はしばしば言葉以外の方法がとられる。しかし権力を持つ存在は、その抗議を無視し、さらなる暴力で沈黙させる。

私たち現代の人間も、「地球」(Earth)から「声なき声」による抗議を受けている。例えば、自然災害(山火事や高潮、水害の増加)や地球温暖化による種の減少や絶滅は、「地球」が私たち人間に対して上げた「声なき声」による抗議である。しかし人間は、技術という力によってその抗議を抑えつける。バラムと同じように現代の人間社会も、気づかぬうちに破滅に向かっているのである。

4.1.3. 主の使い

さて、聖書では主の使いは神と同一視されることが多い³⁷。そもそも主の使い(=神)はバラムを殺すために立ちはだかった。しかしバラムが雌ろばに暴力を振ったので、神は、まず、雌ろばに言葉を与え、次に、自らの姿を現して雌ろばを擁護した。この箇所において主の使い(あるいは神)の姿は、エジプトで打ち叩かれたイスラエルの側に立つ神の姿に重なる³⁸。虐げられるものの側に立つ神は、人間か動物かの分け隔てをしない、虐げられた「地球」の神であることがわかる。

バラムは主の使いとの対話を経て、ろばに怒りをぶつけたが実は神の怒りはバラムに対して燃え上がっており(22節)、剣があればろばを殺すと言ったが剣で殺されそうになっていたのは自分のほうであったことを認めた。その認識を経て、彼は「私は罪を犯しました…」と告白し、回心を遂げた。ここで言う回心とは、自分が見えていなかったことを認め、それまでの行いと世界観を捨てることである。

人間は自然に対して独裁者としてふるまい、自然が自分の思いどおりにならないと、暴力的に制御しようとする。しかし、思いどおりにならない自然は、

37 例えばこの物語でも28節でそれまでの「主の使い」が「主」になっている。

38 民数記22章28-30節のやり取りは、出エジプト記5章14-19節のやり取りを、彷彿とさせる。イスラエルの民も、このろばと同じように、エジプトで何度も打ち叩かれ、ファラオに訴えている。

人間社会が破滅に向かっていることを知らせようとするメッセージなのである。神は、ままならぬ自然を通して、人間にその高慢さを示し、回心へと導く³⁹。

4.1.4. このような読みの限界としての人間中心主義

このような読みは、この物語をバラムの回心物語であることを明らかにした。人間は自然に対して独裁者であるかのようにふるまい、自然が人間の思いどおりにならないと暴力的に制御しようとする。しかし神は、人間の思いどおりにならない自然を通して、人間の高慢さを明らかにし、回心へと導くのである。

他方、この読み方の問題点は、雌ろばがバラムを主の使いから守ろうとしたことや語りかけたことの意味がまったく考慮されていないことにある。物語において、雌ろばとバラムの会話は唐突に中断され、雌ろばは物語の後景へと退けられる。それに代わって、バラムに姿を現した主の使いが雌ろばのふるまいについて説明し、バラムを回心へと導く。つまり、バラムを回心に導いたのは、雌ろばではなく、主の使い(すなわち神)である。

4.2. 同一化

次に焦点を人間から動物に移して、この物語を読む。まず、28節の「私があなたに何をしたというのですか」という雌ろばの言葉からは、この雌ろばが自分には見えている主の使いが、バラムには見えていないことに気づいていなかったことがうかがえる。雌ろばにすれば、バラムの命を守ろうとしたのに、そのバラムから一方的に暴力をふるわれたのである。この暴力は、バラムが雌ろばの「声なき声」——この場合は、道をそれたり、石垣に体をおしつけたり、うづくまったりすること——を聞こうとしなかったから起きたのである。

雌ろばはバラムに「私は、あなたが今日までずっと乗って来られた、あなたの雌ろばではありませんか」(30節)と訴えることで、故郷では互恵関係にあっ

39 『ラウダート・シ』 §216 以下は「エコロジカルな回心」について述べ、§217 は「生態学的危機は、心からの回心への召喚状」と述べる。

たことを思い起こさせる⁴⁰。この互惠関係とは、雌ろばはバラムのために忠実に働き、バラムは雌ろばを自分の家族のように大切にすることである。雌ろばを打つ行為はこの互惠関係を一方的に解消する行為である。したがって雌ろばにとって、バラムが雌ろばを三度打ったことは非道、不公正に他ならなかった。

4.3. 回復

本節の最後に、雌ろばの声の回復を試みる。雌ろばは非言語的方法と言語によってバラムに声を挙げている。先にも述べたがろばは数千年にわたって家畜化されても主体性を完全に奪われたわけではないので、人間の思いどおりに働かないことで抵抗する。この物語で雌ろばがとった「道をそれて畑に入る」「石垣に体をおしつける」「うずくまる」といった行動は、ろばがしばしば人間に対して行う抵抗である⁴¹。抜き身の剣を持った使いからバラムを守ろうとするが、バラムは前に進もうとする。自然の人間に対する抵抗は人間を守ることであり得ると言える。

さて、「主が雌ろばの口を開かれたので」(28節)、ろばは人間の言葉で話し出した。出エジプト記4章11節で神は、自らが雄弁でなく、口も舌も重いというモーセに「誰が人に口を与えたのか。…主なる私ではないか」と語りかける。神は虐げられたもの(人であれ動物であれ)に言葉を与える方である⁴²。

ろばに意思はあるのだが、言葉がないのである。だから、ろばは神によって口が開かれるまで、苛酷な労働を強いられても、不当な暴力を受けても、言葉以外の方法で抵抗するしかなかった。この点でろばは、エジプトのイスラエル人と同じであり、寄留者や奴隷といった貧しい者たちと連帯しうる存在であると聖書は示唆する。

ろばが語った三つの修辞疑問「私があなたに何をしたというのですか」「私は、あなたが今日までずっと乗ってこられた、あなたの雌ろばではありません

40 Viviers, *The 'wonderful' donkey*, 5; Howard, "Animal Speech," 27.

41 コリントス『動物の抵抗』参照。

42 Levine, *Numbers 21-36*, 157.

か」「私が今までこのようなことをしたことがありますか」は、バラムとの親密さ (companionship) を想起させ、その親密さが一方的に破壊されたことの不当性を訴えるものである。

「ろばの演説は、『地球』 (Earth) が不公正に対して声を上げた、文字通りの (文学的ではあるが) 例である。バラムがろばにふるった暴力は不正である。ろばはそれに応答したのである。... 『地球』 は私たち人間の目を開かせる力を持っている」⁴³。この物語の雌ろばは言葉を奪われた「地球」を代表して人間に、人間が「地球」に対してふるう暴力によって「地球」の平和 (神と神に造られたものの有機的なつながり) が絶たれていることを糾弾する。

まとめ

ろばは、人間とともに働き、寝食をともにする、人間に近い存在であった。しかし人間はろばが思いどおりにならないと、鞭やくつわでその自由を奪い、酷使した。ろばは人間にとって、あくまで生産用具であり、財産であって、ともに地を豊かにするパートナー (参照: 創 2:18-20) ではなかった。

他方、安息日規程とろばを保護する法は、ろばが奴隷や寄留者と同じ境遇を生きる存在として認識し、彼らと同じように休息と配慮が与えられなければならないと定める。これらの法は、神が安息日を通して、ろばとイスラエルの小さくされた者たちを解放する方で、両者の連帯を可能とする方であることを示す。

野ろばは人間にこびずに孤高に生きる存在として聖書に登場する。聖書の記者はその姿を貧しい者や追放された者の力強く生きる姿に重ねた。しかし預言者は、発情して雄を探す雌の野ろばを節操がないと見下し、イスラエルを批判するのに用いた。

「バラムとろば」の物語は、バラクとバラムの姿をとおして、力や富で自然を制御する人間の姿を暴露する。バラムが思い通りにならないろばを打ったこ

43 Rees, *Journeying*, 83.

と「私の手に剣があったら、お前を殺していただろう」という言葉は、自然に対して独裁者のようにふるまう人間の姿である。雌ろばのふるまい(道をそれる、石垣に体をおしつける、うずくまる)は、自然の人間に対する抵抗であり、人間が危機に直面していることを知らせるものである。雌ろばは、人間が自然に対してふるう暴力によって、地との親密な関係を破壊していると糾弾する。神は、虐げられたろばに言葉を与え、ろばの側にたって人間に回心を訴えることで、「地球」(Earth)に公正を取り戻すのである。